

サン・ペルメス收容所を襲撃し捕虜を脱走させる任務は、ティアルゴ少佐にとって特別な思いを伴う作戦だった。彼はこの作戦が計画されたとき、自ら進んで実行部隊の指揮官に志願した。

ティアルゴ少佐は野戦指揮所のテントの中で夜の訪れを待っていた。右腕に彫り込んだ梟の刺青は伊達ではない。夜間攻撃の指揮官として高い評価を受けている自負でもあった。收容所内部の武装蜂起と外部からの襲撃のタイミングをいかに合わせるか。それが作戦の要だった。作戦は秒単位まで計画されていたが、実戦では常に予期せぬ出来事が起きる。ティアルゴ少佐は各配下部隊からの報告をチェックしながら、最後のシミュレーションを行っていた。

十月ともなると、夜の訪れは早い。夜が密かに忍び寄ってくる足音すら、ティアルゴには聞こえるようだった。夜を友とし、闇に導かれ、朝日が昇る前に戻る。ティアルゴ少佐がサン・ペルメス收容所を脱走したときも漆黒の闇だった。月明かりはもちろん、星の瞬きひとつない闇の中、彼とハン曹長は駆け抜けていった。二人とも暗視ゴーグルを装着しているような正確さで森を縫うようにして走り、友軍の制圧地域まであと半マイルと迫っていた。ハンが対地雷に触れたのは何万分の一の確率なのだろうか。地雷除去が徹底的に行われているはずの友軍

パトロール地域だった。

ハンの血塗れの首を抱えて走った道をティアルゴはまだ覚えていた。走り抜いた五分間の道のりを隅々まで覚えていた。この作戦を遂行できたとき、その五分間を忘れることが許されると思っていた。ティアルゴは自分の認識票と一緒^{ドッグタグ}に下げたハンの認識票を無意識のうちに弄^{まさぐ}っていた。あの日以来、ティアルゴ少佐はハンとともにあった。

「少佐。小隊長が集合しました」

先任曹長の口ハスが報告に來た。ティアルゴが頷くと、集合した將校がテントに入ってきた。小隊長の顔を一人一人見つめて頷いた。

「この困難な任務によく志願してくれた。各人が既に承知している通り、サン・ベルメス収容所は政府軍の中でも極めて訓練度が高い部隊が守備している。しかも、身元不明の米軍の兵士が収容されると同時に米軍が増強された。不安要素ではないと報告されているが、何が起ころても不思議ではない。私は部隊の損耗率を二十パーセントとみている。だが、無駄な死に方をして欲しくない。各人が最善の努力をした上で生還できるように部隊を率いて欲しい。以上だ。何か質問は？」

再び將校達の顔を見つめる。誰もが正面を見据え微動だにしない。ティアルゴは満足気な笑みを浮かべ、解散と命令した。

將校達がテントを出て行くと、あとには口ハス曹長が残った。

「曹長、君との付き合いはどのくらいになる？」

「少佐が士官学校を出たばかりのときに初めてお会いしましたから……、十二年になりますか」

「そうか。十二年になるか。早いものだな」

「ええ、十二年です」

「私はこの十年の間、一度も教会に行つてはいないが、君と同じ側で戦つことを神に感謝しているよ」

「わたしもです。少佐」

ティアルゴが最後の点検を頼むと言うと、前任曹長は教範通りの敬礼をして出て行つた。ティアルゴもテントの外に出た。そこは、既に夜の闇が支配する世界であつた。ティアルゴ少佐は闇の中で不敵な笑みを浮かべると、友よ見ていてくれと一人呟いた。

5

ティグレ上等兵はマタガルバの北三十キロの寒村に生まれた。本来であれば、昨年除隊になつていたのだが、内戦のせいで任期延長となつていた。平時においての延長は給料のことを思つて我慢するが、戦時とあつては任期が一刻も早く過ぎることを祈りながら、少しでも危険

から遠ざかって待つしかない。

上等兵のティグレがこの午前零時からの不寝番とは。どうして新兵達があたらないんだ。ティグレは森を見つめながら、ぶつぶつと文句を並べていた。この任務のこと、班長のこと、まづい食事のこと、反抗的な眼差しの捕虜達のこと。

彼の不平はそこで途切れた。首筋にチクツとした痛みが走ると、急に舌がもつれ始めたからだった。舌の麻痺はあつと言う間に上半身へと広がり、手にした小銃が落ちそうになった。

その小銃が地面に落ちて音を立てる前に、闇の中から手が伸びて銃身を掴んだ。もう一人の男がティグレの体を支えながらそつと横たえる。空を仰いでいるようにも見えるティグレの目には、何も映っていないかった。故郷の村で待つ両親や今年のトウモロコシのできを心配する必要は、もう、なかった。

収容所の周りに設置された警備ポストを迅速に潰し、湖に面した収容所の南側から侵入した一群は、ほとんど音を立てることなく収容所内へと散っていった。彼らは二十分以内で収容所内の要所に爆破物を仕掛ける。連続して起きるようにセットされた爆発が、これから三十分後に始まるのだ。

所内を巡回する歩哨が自分自身の死を気づくことなく処理されていく。火薬庫、弾薬庫、給油所といった爆発の効果を高める箇所に、無線で作動する爆薬が設置されていく。午前二時まで、あと十二分。

各雑居房では、捕虜達が息を潜めて作戦の開始を待っていた。午前二時に所内で爆発が起こり、救出部隊の攻撃が始まる。その攻撃に呼応して暴動を起こす。救出部隊は捕虜達の分の武器を携行しているから、攻撃力は一気に増加することになる。

所内を監視するTVカメラは正確に作動していた。監視室では十台のモニターが、所内に設置されたカメラの映像を次々と写し出していた。監視員は一台のモニターを眺めているが、モニターの中のウインドウには別の画面が写っていた。コネクトされたPCからはアメリカ映画のビデオが流れている。三十年以上前に作られたアクション映画であったが、ストーリーは展開が早く、一分でも目を離せば筋を追うことができなくなる。彼は画面に夢中になり過ぎていた。映画は佳境に入っており、まじめに監視モニターを見る暇などなかった。

彼がほんの少しでもモニターに注意を払っていたら、コマンド隊員が赤外線を攪乱する野戦服を着込んでいるとは言え、通路を横切ったり、壁に張りついたりして移動する様子を確認できただけだった。

伍長は、主人公が背中にテープで貼り付けていたベレッタを撃つトリックを見せる場面が大好きだった。手を上げた主人公が銃を掴むシーンと同時に、監視室に侵入していたコマンド隊員が伍長の頭を掴むと一気に捻った。伍長の頸椎が乾いた音を立てた。横を向きながら崩れ落ちていく。伍長はボードの上に突っ伏して痙攣した。コマンド隊員は監視装置に向かった。所内の主要な箇所に張り巡らされた警報装置やトラップを全てオフにすると、無線のボタンを二

度短く押した。コマンド隊員は寝ている同僚を慰勞するかのよう、息絶えた伍長の肩を軽く叩くと監視室を出ていった。

午前二時。所内で最初の爆発が起こった。爆発は設定された通りに、次々に連鎖していく。最初の爆発からかつきり三十秒後に、それとわかる落下音とともに迫撃砲弾が撃ち込まれてきた。突撃支援射撃が爆発に合わせて開始されたのだ。

捕虜が収容されている各雑居房では、爆発に呼応した騒乱が起こっていた。収容所内の爆発に慌てている看守は、騒ぎを静めようとして各房に近づき過ぎた。レーザーによるガードライオンが解除されていることに気づいていなかった看守は、捕虜の一人に腕を掴まれ房内に引き摺り込まれた。捕虜達が彼の上に覆いかぶさる。

別の看守は捕虜の鋭い蹴りを受けて昏倒する。暴動は統制を受けた極めて効率の良いものであり、一般の軍事行動と何ら変わりはなかった。看守の武器は奪われ、その武器を持つ者が先頭に立ち露払いとなる。

攻撃部隊が捕虜達に合流すると、捕虜達に小火器を渡し攻撃力を増していく。解放された棟には次々に火が放たれ、政府軍は消火活動と収容所防衛に勢力を分断された。勝敗は明らかだった。周到に準備された作戦は、捕虜達を自由の身へと前進させたが、まだ、気を抜くわけにはいかない。収容所から緊急信号が打電されているはずだ。最寄りの駐屯部隊から一個中隊が送り込まれてくるだろう。彼らと遭遇すれば、激しい戦闘が起こる。あと三十分で全員が収容

所から脱出できるか？ いや、せねばならない。

6

レオンは、所内の様子がおかしいことには気がついていたが、監禁されている以上なすすべがなかった。ノブがないドアに注意を払っているしかなかったが、レオンはドアが開けられると薄々感じていた。

爆発らしい音と震動が連続して起こってから、三十分は経った頃に部屋のドアが開いた。所内の騒乱も一緒に飛び込んでくる。銃を抱えた男が立っていた。

「レオン、来い。ここを逃げ出すぞ」

「ミゲルか？」

「そうだ。逃げ」

レオンは部屋の外に出た。火薬の匂いが鼻孔を刺激する。いたるところで火の手が上がっている。ミゲルと目があった。ミゲルの顔に笑みが広がる。レオンが右手を差し出す。右手に小銃を掴んでいるミゲルは、左手で器用にレオンの右手を握った。

「いまさらあんたを捨ててはおけないからな」

二人は呼吸を合わせたように建物の出口を目指して駆け出した。廊下の角を曲がろうとしたとき、看守が飛び出してきた。看守が銃を構えているのを認めたレオンは、きれいなスライディングキックで男の足元を刈った。素早く立ち上がろうとする男に、ミゲルが小銃の台尻を叩き込んだ。

レオンは看守が落としたH^{（ハット）}・ウント・コッホ^{（コッホ）} & Kを掴んで立ち上がる。交互に援護態勢を取りながら進む二人に、他の捕虜も合流していく。出口まで見通し距離で六十ヤードと迫ったとき、レオンの横を走っていた男が、轟音とともにレオンにぶちあたった。

レオンは男と一緒に倒れながらも、H & Kを正確にポイントして撃った。胸に弾丸を食らった兵士はうずくまるように倒れた。男の首元で何かが光った。

レオンは血塗れの男の体を押し退けて、倒れた兵士へと近づいた。首元をはだけると、龍の形をしたペンダントが現れた。レオンのものだった。彼が収容されるときに、この兵士がくすねたのだろう。

ミゲルが、何をしている、急げ、と声をかける。レオンはペンダントを掴むと、力任せに引っ張った。留め金が引き千切れた。ペンダントをスポンのポケットに押し込む。

視界の隅に白いものが動いた。銃をポイントしながら奥に進む。白衣の男がうずくまっていた。レオンはミゲルを呼んだ。

「どうした、レオン。時間がないぞ」

「この男は誰だ？」

ミゲルは小銃で男をこづきながら顔を上げさせた。

「これは、これは、ドクター・モス。こんなところで、どうしたね？」

「ドクター・モス？」

「ああ、そうだ。あんたを閉じ込めていた張本人さ。片を付けるか」

モスが怯えた目でレオンを見上げる。蔑みの表情を浮かべるレオンと視線が絡み合う。モスが先に目を逸らした。

「片を付けるほどの男とは思えん」

踵かかとを返して、二人は出口へと進みかけたが、レオンは振り返るとモスの足元に散乱する書類に目を留めた。手近な一枚を拾い上げると、レオンの人差し指のプリントアウトだった。ざっと目を走らせてポケットに押し込んだ。急げと叫ぶミゲルに背中を押されレオンは走った。

あとに残されたモスは、ぶつぶつと口の中で何か呟いていた。先程までの怯えた表情とは違って変わり、目に怒りの色が浮かんでいた。壁に手をつけて立ち上がると、モスはレオンが走り去った方向を見つめながら、搾り出すような声で叫んだ。

「レオン・ホウ。貴様をもう一度この手で締め上げてやる！」

モスの後方で大きな爆発が起こった。

ウェイン・マーチンは、机の上に足を投げ出して、ホログラフィック・ディスプレイで新聞を読んでいた。磨きこまれたジョンストン・アンド・マーフィーの黒いモンク・シューズにディスプレイの文字が反射している。光沢のある深い紺色のネクタイはルーズにゆるめていた。黒人としては明るい、クリーム色に近い肌の持主だが、顔色は曇っている。かつての依頼人の死亡記事が載っていたのだ。その男に頼まれて失踪した娘を無事に保護したものの、彼女は一月後に自殺してしまった。問題が家庭内にあつた以上、遅かれ早かれ悲劇が起ることを避けられなかったわけだ。

拳げ句の果てに、依頼人自身が事業に行き詰まり自殺だ。こんな話が珍しくもない。それがエッジシティの現実というものだ。先月はM&Aに絡んだ株の不正取得の調査を監査法人から依頼され、二週間で片を付けることができた。この監査法人は金払いが良かったから、少なくとも二カ月は仕事がなくとも食っていける。

マーチンは有力者に覚えが良かったから、一週間と仕事が空くことはないが、いささか疲れが溜まっていた。一週間の休みを取っても仕事が逃げていくことはない。

マーチンは、休業のメッセージを吹き込もうと電話に手を伸ばした。その途端、電話が鳴った。舌打ちしながら、マーチンは受話器を取った。

「ウエイン・マーチン探偵事務所だ」

「あんたは、腕利きの探偵かい？」

「いきなりなんだ。名前を名乗れよ」

こんな話の切り出され方をしたことはなかった。マーチンの本来の客とは思えない。TV電話のモニターも黒いままだった。モニターが故障した公衆電話からでもかけているのだろう。

「電話番号案内をアルファベットの逆順で検索したら、あんたが五番目だった。それで、電話をしたんだが、腕利きかどうかは本人に聞かなきゃわからないと思ってね」

「俺の客でイエローページを使った奴はあんたが初めてだよ。しかも、アルファベットの逆順だと？ 三流の探偵小説並みの方法だな」

「探偵小説なら、アルファベット順だろ。その場合、ろくなことになりゃしない。それより、どうなんだ、あんたは腕利きかい？」

「そう聞かれて、俺は売れない探偵だなんて言うと思うのか？」

マーチンが呆れながら答えたが、男は意に介さない様子だった。

「あんたが腕利きかどうか答えてくれれば、俺にはそれでわかる」

自信が溢れる彼の口調は、マーチンを苛つかせた。わかるというのは、どういう意味なのだ。

「では、答えよう。俺はすこぶる優秀な探偵だ。その上、料金も高い」

しばらく沈黙が続く。

「頼みたいことがある。あんたの事務所から道路を渡ったところにある公衆電話から掛けている。今から上がっていくから待っていてくれ」

マーチンが答える前に電話が切られた。

なんとという月曜日だ。

休みを取ろうとする直前に、わけのわからない男から依頼が舞い込んできた。しかも、今すぐやってくるだ。どうも、秋頃から俺の運勢にチョツカイを出している奴がいるようだ。マーチンは四文字言葉を連発しながら、窓の外を覗いた。

彼の事務所が入っているビルを指して、道路を横断してくる奴は何人もいる。マーチンは溜息をついて、男が現れるのを待った。

二分で男の声がドアフォンから響いた。

「開いている。勝手に入ってきてくれ」

男が入ってきた。東洋人としては背が高く、よく日に焼けていた。髪は中途半端に伸び、薄汚れたワークシャツに、履きこんだジーンズ。袖を捲くり上げた腕には、細かい切り傷や、銃創を思わせる傷跡がある。角ばった顔立ちだが、粗暴さは感じさせない。疲れが顔に出ているが、東洋人らしからぬ大きい目には力強さが宿っている。

「ウエイン・マーチンだな」

男の顔に笑みが広がった。人懐っこい微笑みだった。男が近づいてくる。男はマーチンより四インチほど背が高い。肩幅が広く、脂肪のかけらもない腕からも節制して体を鍛えていることが知れる。男は右手を差し出してきた。

「俺はレオン・ホウだそうだ。仕事を依頼したい」

マーチンはレオンの右手は握らず、腕を組んで机に浅く腰をかけた。

「まだ、引き受けるとは言っていないぜ。俺は今日から休暇を取るつもりだったんだ。それに、変なことを言ったな。レオンなんとかだそうだ？ 自分の名前だろう。自分の名前を知らないよ。うないかれた奴を客にする気はないぜ」

男は困ったような顔を見せたが、また、にっこりと微笑むと、マーチンの目を見つめた。胸の奥底まで見透かされた気がして、危うく身震いしそうだった。

「俺は自分の名前しか知らないんだ。記憶喪失だ。だから、俺が何者なのかを調べて欲しい」

マーチンは、しばらくレオンを見つめていたが、いきなり笑い出した。レオンはマーチンを見て無然とした表情を浮かべ、行き場を失った右手とマーチンを交互に見た。

「悪い、許してくれ。俺は探偵社に勤めていた頃に、脅迫を受けた精神科医の警護をしたことがあるんだ。面白い仕事だったよ。あらゆる類の患者がきた。ここで、あんたにクイズを出そう」

マーチンはレオンに人差し指を向けて、円を描きながら続けた。

「失語症の患者が最初に忘れる言葉は何だと思う？」

「わからんよ。そんなこと」

「^{アイ}エだよ。第一人称を忘れるんだ」

レオンはなんと答えてよいかわからない。

「つまりだ。自分の名前だけ覚えている記憶喪失というのはあまり考えられない」

「ああ、そういうことか。実を言えば、名前も認識票を見て覚えているに過ぎない。とにかく、自分の過去を思い出そうとするとフラッシュバックが起こる。正確には記憶喪失とも違うかもしれない」

「だったら、なおさらごめんだな。俺ではなく、精神科医に行くべきだ。それに、認識票と言ったな。お前さん、軍人あがりか？　ますますもって、やばい。お断りだね」

真顔になったマーチンはレオンの視線にもたじろがず、突き放すように答えた。

レオンはまた困ったような表情を浮かべ、金の問題かと聞いた。

「顧客には恵まれているんでね。金に困つちやいない。何の解決策も保証できないから、やりたくないといっているんだ。依頼を受けるということは、解決の可能性があるということだ。あなたの過去を調べるにしても、何らかの手掛かりは必要だ」

レオンはポケットから薄汚れた紙を取り出してマーチンに渡した。レオンの陸軍における人事データだった。最後の記録がA T S F（対テロリズム特殊部隊）のものだった。

それを一瞥したマーチンが首を振った。

「ここにちゃんと全てが記録されているじゃないか。時間はかかるかもしれないが、あなたの過去を手繰るには十分な記録だ」

「でも、じっくりこないだ」

「どういう意味だ」

「これが自分自身のことだとは到底思えない。俺の直感みたいなものが何か作り物めいた記録だと警告している感じなんだ。変な言い方だが、それに手掛かりはまだある。これは調査の支払いに当てるつもりなんだが」

レオンはそう言いながら、首からペンダントをはずした。マーチンに差し出す。見事な金細工の籠だった。マーチンは思わず籠を手にとつて細部を調べた。

マーチンは有力者との付き合いが多くあったから、装飾品の類には目が利くと自負していた。彼の目にも金の籠の価値は明らかだった。年代を特定することはできないが、百年や二百年は経っているものに違いないだろう。金の純度も高そうだ。

「俺が戦場でも身に付けていたものだ。お守りか何かだと思つ。俺の身元と関わりがあると思つ」
マーチンもその言葉に頷いた。この籠は街の骨董屋やオークションで手に入れる類のものではない。代々、親から子へと伝えられるものに違いない。中国の古い時代のものだとすれば、この男、見かけとは違って家柄も良いのかもしれない。

「もうひとつ手掛かりがあるんだ」

レオンはそう言うと、ワークシャツのボタンをはずし始めた。

「おい、おい、こんなところでストリップでも始める気か。俺にその手の趣味はないぞ」

レオンは、マーチンの言葉には構わず、ワークシャツを脱ぎ捨てると、マーチンに背を向けた。レオンの背中には鮮やかな龍の刺青が施してあった。その色彩と量感には生命感が溢れるというだけでは言葉が足りない。生々し過ぎた。今にもテニスボールほどある龍の左目が、マーチンの方へと動きそうだった。しかも、ペンダントの龍と描かれ方が酷似していた。

刺青と金のペンダントを見比べているマーチンにレオンが声をかける。

「手掛かりになると思わないか。こんなに見事な刺青を見たことがあるかい？」

レオンはマーチンの方に向き直り、ワークシャツを着始めた。マーチンはペンダントを手のひらで転がしながら、考えをまとめようとしていた。

「この金のペンダントの年代が古いことは、素人の俺でもわかる。この形を摸して、背中中の刺青が彫られたと考えれば辻褄は合う」

「理屈ではそうだろうが、俺自身が釈然としなない」

しばらくレオンと顔を見合わせていたマーチンが、いきなり、ペンダントをレオンの手に押し戻した。

「まだ引き受けたわけじゃない」

「あんたも往生際が悪いな。そのペンダントが調査の報酬だ。それで賄えるだけの範囲でいい。やってくれないか」

マーチンは黙ったままだった。得体の知れない男の身元調査など引き受けるべきではないことは、過去の経験から判断してもわかりきったことだが、龍の刺青が目には焼き付いたまま離れない。レオンの顔とオーバーラップする。レオンは押し黙った。マーチンも考え込んだまま、時間が過ぎていく。

好奇心が勝った。マーチンはやってみようと静かな声で言った。レオンに人懐っこい笑顔が戻る。レオンが右手を差し出してきた。マーチンはその手を平手で弾いた。

「勘違いするな。このペンダントを調査費用として頂くが、それが目当てでやるわけじゃない。俺が好奇心を抑え切れないだけだ」

「わかっているさ。最初にあんたが優秀だと答えたときから、わかっていたことだ」

「また、訳がわからんことを」

マーチンはペンダントの預り証がいるかと尋ねた。レオンはいらないというように手を振り、応接用の椅子に腰を下ろした。

マーチンはレオンの向かい側に座ると、話を切り出した。

「さて、何から聞くべきか……。まず、この街に来た理由から話してもらおうか」

レオンは戦場で意識を取り戻してからのことを話し始めた。たった一人、傷を負いながらも

生き残っていたこと。味方のヘリからの狙撃。捕虜収容所での監禁。米軍への不信任感。彼を観察していた研究者グループ。収容所からの脱走。その後、ニカラグアから合衆国へと渡り、地下組織の世話になっていること。

レオンが説明している間、マーチンは一言も口を挟まなかった。挟む余地もなかった。レオンの話し方は筋道だっており、論理的思考を身につけている証拠でもあった。

「あなたが監禁されていた理由だが、部隊の全滅にあんたが関与していると考えるのが筋だろうな」

「そう考えたくはないんだが。どのように関与していたのか想像もつかない」

「あなたが何かの拍子で暴走して、敵味方構わず攻撃したというのは？」

「俺の所屬していた部隊が本当にATSFだとしたら、全員が経験を積んだすこぶる優秀な兵士だ。俺一人で片付けるなんてできるはずもない。それに敵部隊も含めての全滅だ。なおのこ」と無理だね」

「では、なぜ、腫れ物に触るように観察されていたのだろう？」

「今となってはわからん。脱走のどさくさで手に入れることができたのは、その書類だけだ」

「軍のコンピュータにアクセスするのが手っ取り早いだろうが、気を付けないとジョーカーを引く恐れがあるからな。あんたが追われる身であるならば、こっちもやばい。そうした危険を回避するには、あんたの置かれた現状を知ることから始まる」

レオンが頷く。

「俺も記憶のかけらが見つかったら、必ず連絡するよ。だけど、人事記録や話したこと以外の手がかりは、そのペンダントと背中への刺青だけだ」

マーチンはレオンにもう一度龍の刺青を見せてくれるように頼んだ。PDAにデジタルカメラのアタッチメントをつけて、様々な角度から撮影した。この刺青の映像をキーにして検索できるデータベースが見つかるかもしれない。

「何か掴め次第、連絡する。連絡先を教えてください」

「ノースウエスト・テレコムの子会社とフリーメールでもいいか」

「携帯電話を持っていないのか？」

「使えないんだ。買ったけど、すぐにいかれてしまっ」

「どういことだ」

「俺の体が持つ静電気は随分と電位が高いらしくてね。市販の携帯電話が持つシールド程度じゃあ、静電気に耐えられないらしい。三台おしゃかにしてあきらめたよ。ボイスメールは午前と午後には必ず聞くようにする。聞いたら折り返し電話するよ」

マーチンは肩をすくめて、レオンが言った電話番号をメモした。レオンは立ち上がったマーチンに握手を求めた。今度はマーチンも素直に握り返すと、期待せずに待っていると言った。

「いや、期待しているよ」

そう言い残して、レオンは事務所を出ていった。

マーチンは調査費用として受け取った龍のペンダントを、もう一度見つめた。こんな高価な代物を持っていながら、友人のアパートに居候か。おかしい奴だ。

龍は雲の間を突き進む姿を描いたものだった。力強く優雅でもあった。さて、まず何から調べる？ 軍のコンピュータに潜入するか。いやいや、この龍の価値を知ることから始めよう。マーチンは馴染みの故買屋に電話を入れると、これから訪ねていくことを伝えた。事務所を留守にするというメッセージを留守番電話に入れた。マーチンはゆるめていたネクタイを締め直し、小豆色のジャケットを手にすると事務所を出ていった。

8

ジャクソンは、道を挟んだ向かいのビルから出てきた男に、ふと、視線が吸い寄せられた。まさかと思った。男の横顔しか目にしなかったが、見間違えるとは考えられない。背が高く広い肩幅。すっとのびた背筋。上半身を動かさず優雅に歩く姿。忘れようがない。ジャクソンは男を尾行し始めた。自分の知る男であれば、おそろしく勘のいい奴だと承知していたので、彼の顔を確認することだけを考えた。

男は急いでいる様子ではなかった。ジャクソンは足早に歩いて男の顔が斜め正面から確認できる位置まで進んで振り返った。決して見間違えることがない鋭い目。ロン・リーだ！間違いない。奴が帰ってきた。リーが帰ってきたという情報は流れていなかった。フル・ドラゴン 青龍泊に動きがないのはどうしたわけだ。

いきなり、男と視線があった。動けない。ジャクソンは男の視線に釘付けになった。ばれたと思っただ、男は興味なさそうに視線をはずした。視線をはずされても、ジャクソンは動けなかった。二分ほどそのままでもいたろうか。やっと、安堵の気持ちが湧いてきた。首筋を汗が伝わっていた。

ジャクソンは携帯電話を取り出すと番号をプッシュし始めた。

二ツクが出ると早口でまくしたてた。電話の相手が落ち着けと言い聞かせる。

「ジャクソン。何を言っているかわからねえ。もう一度、最初から話せ。誰を見かけたって？」

「リーだよ。ロン・リーだ。奴が帰ってきたんだ」

「何を馬鹿なことを言っているんだ。奴は家を出てから、行方知れずだろう。おふくろが死んだときにすら現れなかったんだ。奴がどうして戻ってくるんだ」

「親父が入院したから戻ってきたんだ。跡目を継ぐんだ！」

ジャクソンは耳の汗が気になって携帯電話を反対の耳に当て直したので、相手の言うことを聞き漏らした。

「えっ、何だつて？」

「よく聞け、馬鹿野郎。ロンはファミリー・ビジネスが気にいらなくて飛び出したんだぞ。なんで、そんな奴が跡目を継ぐんだ。わかりきったことを俺に言わせるな。こんな馬鹿げた話で時間を潰すんじゃない」

「本当なんだつて。この目で本当に見たんだ。奴に間違いない」

「だったら、証拠のビデオでも撮ってこい。馬鹿野郎！」

電話が切られた。

ジャクソンは携帯電話を地面に叩きつけると、撮ったろうじゃねえかと大声で叫び、足早に人ごみの中へ消えていった。

9

マーチンは籠のペンダントを調べる故買屋の手元をじっと見ていた。故買屋のジョーは、この世界で「せこいこと」は一切しない男で通っていたし、巧みな捌き方で警察に尻尾を掴ませないことでも信用を得ていた。マーチンもずいぶんと世話になっていた。もちろん盗品を捌くために付き合っているわけではない。マーチンには、盗まれたことをおおっぴらにせず買い

戻したいという顧客がいた。入手経路を明らかにできないまま鑑定を依頼したいという顧客もいた。彼らはもちろん故買屋と直接接触するなどありえない。マーチンの依頼に余計な質問を挟むことがないジヨースは頼れる男だった。

ジヨースはルーペで念入りに調べたあと、PCに接続された金属分析器にペンダントをセットした。

「念のためだよ。まず間違いないと思うがな」

ジヨースがリターンキーを押すと、PC上には複数のウィンドウが立ち上がりグラフや数値表を表示した。

「純金だ。作られた時代は相当古い。十五、六世紀の頃か。腕の良い職人が作ったものだよ。オークションに出したら、普通の蒐集家でも五万の値をつける」

ジヨースの含みのある言葉に、マーチンは素早く反応した。

「普通でない奴らなら？」

ジヨースがニヤツと笑い、眼鏡をはずした。ふつと息を吹きかけて眼鏡の汚れを拭い、掛け直した。

「ウエイン、ハンフエ 帮会バンフエって聞いたことあるか？」

「いや、ない」

「帮会というのは、中国人の秘密結社なんだ。チンパン 青帮チンパンともハンメン 洪門ともいう」

「チャイニーズ・マフィアか」

「いや、違う。青幫は海運組合と結び付いた宗教的な結社で洪門は政治的な、言わば反体制的な結社なんだ。その二つの集合体が幫会あるいは洪門会ってわけだ。もともと、今じゃ、チャイニーズ・マフィアと同じようになってるがね。それで、幫会には必ず頭領がいるんだが、絶大な権力を持っている。権力の継承は世襲の場合もあるが実力による場合もある。また、頭領を象徴するものを譲ることによって、継承が行われることもある」

ジョーはそこまで言つて一息つくと、マーチンを見た。わかるだろうと目が問いかけていた。「この龍は権力を象徴するものなんだな」

「本物だとすればだ。もし、本物ならば二千万出しても欲しいという奴がいるだろう」

マーチンは思わず桁数が違わないかとジョーに聞き返した。ジョーは首を振った。マーチンの顧客でも、それほどの資産を持つものは決して多くはない。

「この龍は本物なのか？」

「わからん。純金を使う偽物も少くないからだ。例えば時代だけを考慮しても、これと同じ時代の偽物もあれば、これより時代が下がる本物もある」

マーチンは肩をすくめ、分析器にセットされたペンダントを覗き込んだ。

「そうになると、俺は五万の仕事をする方がいいのか、二千万の仕事をする方がいいのか、わからないのだな」

「そんな問題で済むかね。ウエイン」

マーチンはどういう意味だと聞き返した。

「これが本物だとすれば、龍の持主は幫会の頭領だということになる。その男が記憶喪失たの、ニカラグアの反政府組織に絡んでいるのだのでは、一騒動あるんじゃないのか。違うか？」

マーチンが考え込んだ。腕を組んで自分の足元を見つめた。

「あなたの言う通りだ。ただのいかれた奴には思えなかったから引き受けたんだが。まずいな。チャイニーズ・マフィアなんぞには生憎と、つてがない」

「どうする、ウエイン？」

「まだ、考える気にもなれんね。そうだな。奴の正体を掴むことから始めるよ。正攻法でな」

「正攻法と言うと？」

「人は背中で過去を語るつてな。ペンダントは預けておくよ」

また連絡すると言い残し、マーチンは外に出ていった。

あとに残されたジョーはマーチンを見送ると、椅子に座った。PC上の分析結果を自分なりに加工し始めた。作られた年代を元に、中国史のデータベースを検索したり、金加工品のデータベースで似たような金細工を探したりした。丹念にメモを取りながら、一人頷く。

信用を築き上げてきたこの男は、決して手を抜こうとはしなかった。彼にとつて、この金細工の出所を突き止めることは堪らなく魅力的な仕事だった。それは熱意などではなく、度を越

した好奇心だと人に言われようが知ったことではない。結果は同じものだ。ジョーはマーチンが再度訪れるときのために、資料を完璧に揃えることを決めていた。

マーチンが次に足を運んだのはタトゥー・ショップだった。故買屋のジョーのように信用できる刺青師を知っているわけではないので、とりあえず町中で店を構えている刺青師を直接訪ねるつもりだった。そこから手繰っていく方が結局は早いだろう。旧市街に限りなく近い地域のひとつ、シテイホール通りにあるグレート・タトゥーという店は軍人達がよく出入りしていたし、インターネットの検索エンジンで調べてもほぼトップラインにランクされる。

店の前に車を止めて中に入っていくと、店内の壁一面には刺青を施した男女がポーズを取った写真が飾られていた。ご丁寧なことに、店の中央では3Dホログラフィで全身に刺青を刺した女性が回転している。

マーチンがそのホログラフィに見とれていると、奥から女性が声をかけてきた。二十七、八歳くらいだろうが、黒髪を長く伸ばし、濃い紫のアイシャドーがいやに目立っていた。黒いTシャツに黒い革のベストとパンツを着ていたが、ワンサイズは十分に小さい。Tシャツから開

放された左の二の腕には髑髏が、右腕には羽ばたく鷲が彫り込まれ、それぞれの存在を主張していた。

マーチンは彼女に近寄ると、にこりと笑いかけながら二十ドル札とともにレオンの背中を写したプリントを差し出した。

「この刺青について、あなたがわかることを話してくれないか」

刺青の女は怪訝な顔をした。二十ドル札と写真を交互に見比べ、ついでにマーチンを見た。

「ええつと、少なくとも、うちでやったものじゃないわね」

「それはわかってる。この刺青と似たようなものを見たことがあるとか、この刺青を彫れるのは誰だとか、そんなことを聞きたいんだ」

「そうね、雑誌やオンライン・ミュージアムでこんな龍を見たことがあるけど。このタイプの龍を彫るのは、中国人や日本人、たまにベトナム人かな。やばい奴らが多いんだ。チャイニーズ・マフィアやヤクザだね」

女はネックレスにぶら下がった馬の形のペンダントをもてあそびながら答えた。

「そのぐらいいは想像がつく。二十ドル分は話してくれよ」

「ちよっと待ってよ。そんなことわからないわよ。そこにあるPCで調べたら？ 使っていないからさ」

女が店の隅にあるPCを指差した。

「なるほど」

マーチンは頷くと、手の中で二十ドル札と十ドル札をマジックのように入れ替えて女に渡した。女は不満顔だったが、マーチンは無視して旧式のPCの前に座った。

マウスを動かすと、骸骨が踊るスクリーン・セイバーが消えた。モニターには「ハロー！ タトゥー・ワールド」とタイトル文字が踊る画面が現れた。

画面にはタトゥー・ショップガイドや刺青の歴史などといったメニューが並んでいたが、右には検索用のスペースもあつた。マーチンは検索キーをいくつか打ち込んだ。龍、雲、右向き顔、爪が握る玉。写真を見ながら思いつくまま入力していく。検索をスタートさせると、背中を彩る刺青がめまぐるしく画面に現れては消えた。

画面が切り替わり龍の刺青が整列し始めた。最初に現れた龍をクリックすると拡大された画像にフェードインした。レオンの刺青と寸分違わぬようなものではないが、構図は良く似ていた。明らかに違いは流れる雲の有無か。刺青を入れている男は匿名ではなかった。アキラ・タカセガワ。故人である。キャプションによれば、抗争で殺された日本人のヤクザだった。

このデータベースを作った奴はどんな手を使って、これだけ多くの画像を手に入れたのだろう。モルグに潜り込んだのか。検死官に鼻薬を嗅がせたのか。まあいい、俺の役に立っていることは事実だ。

マーチンは刺青を施した彫り師を調べた。コウゾウ・ニシムラ。日本人だ。マーチンは住所

を確認しようとしたが、それを調べるにはパスワードが必要だった。

マーチンが女に声をかけると、カウンターの跳ね板を上げる音が聞こえて足音が近づいてきた。マーチンがパスワードを教えてくれと言いながら顔を上げると、女ではなくフトポール・ブレイヤー並みの体をした男が立っていた。女と同じデザインの革のパンツとベストを着て、髪をポニーテールにまとめていた。男の場合は盛り上がった筋肉がベストのサイズをワンサイズ広げていた。ふてぶてしい顔つきで黒い瞳には尊大さと冷酷さを湛えている。

「パスワードがどうしたって？」

高くハスキーな声だった。

「いや、なに、このデータベースがパスワードを要求してきたね。そいつを教えてもらおうと思っただけだ」

「そうか。何を調べたいんだ」

「この彫り師の住所だ」

マーチンは背中を掻くふりをして右手を回して、スタンガンのスイッチを入れた。

「お前がその刺青を入れるのか？ 黒人の肌には似合わんぞ。まあ、お前くらいの肌の色なら刺せないこともないがな」

男がニツと笑いながら言った。

「親にももらった体に加える気はないね。この写真の刺青について知りたいんだ」

男の鼻先にレオンの写真を突きつける。男の視線が写真に移った隙にスタンガンを用意するつもりだった。革ベストの男は視線をマーチンに据えたまま動かさずとどまっていた。腕を組んだまま話しているものの、隙がない。研ぎ澄まされた日本刀のような殺気を持っていた。

「この刺青を施した彫り師を探しているんだ。それだけのことだ」

「ここは、そんなことを詮索する場所じゃない。刺青というアートを語り合うためにある」「そうか、わかった。この店を誤解していたようだ。退散する」

マーチンは男の視線をはずさず、静かに立ち上がった。立ち上がってみると、マーチンと八インチは身長が違った。男はしばらくマーチンを見下ろしていたが、すっと体を出口側に開いた。マーチンは神妙な顔つきで男の横をすり抜けていく。出口の少し手前で、男が声をかけた。マーチンはゆっくりと振り向いた。

「あんた、何て名前だ」

「ウェイン。ウェイン・マーチン」

「覚えておこう。俺はジョルジュだ」

男がニツと笑った。オセロツトは、きつとこんな笑い方をするんだろう。

マーチンは新市街の中心部に戻ると、車を駐車場に置いてコーヒーショップに入った。カプチーノを頼んで隅のテーブルに陣取ると、PDAを取り出した。リモート・アクセスで自宅のPCに接続し、アンダーグラウンドのネットワークにアクセスした。タトウ・ショップで調

べた彫り師を検索した。検索結果がなかなか戻ってこない。与えた条件が多過ぎたかと呟いて、マーチンはカプチーノをすすった。さらに二口飲むと、やっと結果が返ってきた。遅いわけだ。ニシムラのデータはタトウ・アーティスト協会の会員としてちゃんと登録されていた。協会のサイトから彼のプロフィールが引つ張られてきている。アンダーグラウンドのネットワークにアクセスしたせいで逆に遠回りしたようだ。彫り師コウゾウ・ニシムラはタトウ・アーティストとして、ビジネスを営んでいると認められているのだ。マーチンにはちよつとした驚きだった。たしかに刺青は違法行為ではない。相手がまっとうな市民だというのならば、まっとうな方法でアプローチした方が早い。

マーチンはカプチーノを飲み干すと、ニシムラの家へ向かうことにした。ニシムラの住むアパートへは、車より地下鉄の方がアクセスしやすい。駐車場には戻らずに地下鉄のセントラル駅に向かった。すぐにイースト・ラインの車両を捕まえることができた。

空いている席に座ると、PDAを取り出してニシムラのプロフィールを読み始めた。ニシムラは一九六二年に東京で生まれ、十九の時に師匠のコレカワに弟子入りしていた。彼が独り立ちしたのは、三十三歳の時だった。

独立の時期がはたして早いのか遅いのか、マーチンには見当もつかない。刺青をアートにたとえるのならば、モネのように死後に評価される彫り師がいるのかもしれない。彫られる側も自分の体のことだけに、彫り師の選択には相当真剣になるのではないか。

ニシムラのデータの中には、彼が「作品」として彫り上げた刺青の持主とその図柄があった。龍、虎、鳥、亀。亀だと？ 亀を背中に彫って喜ぶ東洋人は、やはり理解しがたい人種だ。陸軍にも好んで刺青を腕に入れていた連中がいた。彼らは部隊章や国家の象徴たる鷲、あるいはモットーを彫り込むのであって、体をキャンバスにするわけではない。

ニシムラが彫った相手はヤクザと呼ばれるジャパニーズ・マフィアが多いのだろうか？ さすがに、そこまでは記述されてはいない。別のデータベースをあたれば、誰がどの組織で、どれだけの地位にいるかわかるだろうが、それはマーチンの仕事ではない。

マーチンは、ニシムラのプロフィールに戻り、先を読み進めた。彼が新市街の住人となり得た理由があった。彼の技術を市立大学の比較文化人類学の教授が紹介したのだ。彼の技術がアートとして認められたのである。しかも、彼自身が教壇に立つて刺青の歴史を語ったらしい。

こうした生業の者が教壇に立つことは相当な抵抗があっただろう。ニシムラという男に興味を持った。学生を前にして、どんなことを話したのだろうか。少なくとも退屈な授業にはならず、もしかしたら、新規顧客を得るのに成功したかもしれない。

十五分ほどでコパーフィールド駅に着いた。マーチンは軽やかな足取りで駅の階段を駆け昇ると、ニシムラの住所を目指して西に向かった。コパーフィールドの辺りは典型的なダウンタウンで、古い食堂を中心にして商店が広がり、路地から一步奥に入ると大小のアパートがひしめき合っている。

その中でもかなり年季が入っているビルがニシムラのアパートだった。未だに郵便受けが玄関の壁にへばりついているのはご愛敬だった。ニシムラの名前は消えかけた文字ではあったが、確かに四 三号室にあった。マーチンは階段に向かった。

この縁が擦り切れた階段を、ニシムラの部屋を目指して歩いていった男や女がどれだけいたのだろう。それとも、ニシムラが客のところへと足を運んだのだろうか。四階までの階段は、決して短くはなかった。決心がつかずに後戻りした者もいただろう。なるほど、アトが苦痛とともに産み出されるとすれば、刺青にも十分アトたる資格がある。

ニシムラの部屋は四階の真中の部屋だった。いつもの習慣で特別注文の警報器センサーを取り出すと、部屋のドアに取り付けられている各種警報器のチェックを行う。結果はゼロ。驚くことに、ニシムラは警報器の類をひとつも備え付けていなかった。マーチンは拍子抜けしたまま、ドアをノックした。部屋の中をこつこつと足音が響き、訪問者を問う声が聞こえた。

マーチンは名乗り私立探偵の許可証をドアスコープの前に掲げた。標準仕様の警報器であれば、マーチンの許可証のコードを読み取り正規ライセンスであることを検知するのだが、ここではニシムラがその目で確かめる。正規ライセンスであるうとなかろうと、ニシムラは招かれざる客を部屋に入れる必要がない。

幸いドアは四インチほど開かれた。白いものが多く混じる髪を短く刈り込み、灰色のシャツを着た男が顔を覗かせた。男の瞳は大きく開きマーチンを見返していた。男の顔には三本の皺

がくつきりと刻まれ、薄めの唇は固く結ばれている。これでよく日に焼けていたなら、庭師で通るかもしれない。

「探偵が何の用だ」

ニシムラが言った。マーチンはレオンの写真をニシムラに渡しながら、

「この刺青のことを何でもいいから知りたい」

と答えた。ニシムラは受け取った写真を手にして、しばらく考え込んでいた。

「入りな」

ドアチェーンがはずされる音とともにドアが開かれた。部屋の中はきれいに片付いていた。建物の築年数を考えれば、傷み方が少ないほうだろう。ニシムラは部屋のサイズに比べて不釣り合いに大きなロッキングチェアに体をあずけると、写真を眺めたままマーチンに尋ねた。

「で、何を知りたい」

ニシムラの声はざらざらとした悪声だった。

「何でも。あんたがわかることは全て」

「そいつは難しい相談だな。あんたが刺青のことをどのくらい知っているかわからんし、わしの答えたことが、誰のところにもどんな風に伝わるのかもわからん」

「ごもつとも。まず、俺の依頼人は、その刺青の男だ。記憶喪失で背中への刺青が記憶の手掛かりになるんじゃないかと思っっている」

マーチンが部屋の隅にある椅子を差しながら座っていいかと尋ねると、ニシムラは微かに頷く。部屋を横切り、マーチンは椅子を引き寄せて逆向きのまま跨るように座ると、背もたれに両腕を預けた。

「俺が知りたいことは、その刺青を彫ったのはあんたなのか、あんたでなければ、誰が彫ったのかわかるか。そんなところだな」

「わしが彫ったとしたら、記憶のどんな手掛かりになる？」

「彼が刺青を入れた理由。デザインを決めるにあたっての理由。カードが使えるのなら、その請求会社。保険が利くのなら、保険番号」

ニシムラが堪えるような笑い声を出した。

「あんた、面白いな。カードや保険が使えるなんて、本当に思っちゃいないだろうな。ところで、誰にわしのことを聞いたんだ」

マーチンは肩をすくめ、データベースだと短く答えた。

「この頃は人にものを尋ねんと、コンピュータに何でも調べさせるんだな」

「早いし確実だからな。それに彫り師のことなど、誰に聞けばいいんだ？ 旧市街のタトゥー・ショップで調べたよ。ジョルジュって男がいた」

「ジョルジュという名前にニシムラが微かに反応した。普通の者には気がつかない程度にだ。そうか。そういうもんかい」

ニシムラは写真に目を落とした。写真を見ているのか、自分の手を見ているのか、わからない。急かせるべきではない。ニシムラがもう一度話し出すのを待った。壁に掛かった時計がぜんまい仕掛のアンティークだと気がついた。時を刻む針の音が大きい。

「これが刺青だとは思えねえ」

マーチンに話しかけたのだらうか。違うようだ。ニシムラが先を続けるのを待った。

「ああ、そつだ。どうしても刺青とは思えねえ」

「なぜ、そつ思う」

「わしには、こんな刺青を彫れねえからだ」

ニシムラが視線をマーチンに戻して答えた。

「どうして彫れないんだ？ 俺は刺青には詳しくない。講義をしてくれないか」

ニシムラが、また黙った。次に口を開いたのは時計の秒針がかつきり六十回打ったあとだった。

「あの教授はとんだ食わせもんだつた。わしの伝統技術を研究したいとほざきながら、奴め、政府の犬だつたぜ」

「犬？ どういう意味だ」

「お前さんは、化粧彫りって知ってるか？」

マーチンが首を横に振ると、やれやれと言つよつにニシムラも首を振った。

「化粧彫りってのはな、普段は墨が入っているようには見えねえが、熱い湯に浸かったり、酒

飲んだり、興奮したときにだけ現れる刺青のことよ。CIAの馬鹿どもが何かやらかそうと目論んで、わしに目をつけたのさ」

「で、どうしたんだ。その化粧彫りを教えたのか」

ニシムラは手に持った写真を振りながら、違う、違うと答える。

「わしには化粧彫りは彫れなかった。師匠は彫れたがな。あの化粧彫りつてのは、一子相伝だ。わしには教えてくれず、そのまま墓の中に持って行っちゃまった。お嬢さんは彫れたかもしれんが」

ニシムラは昔を懐かしむような目をして、窓の外を見た。三度目の沈黙。マーチンは 焼きが回ったな と思いながらも、ニシムラの思つままに語らせることにした。

「わしはお嬢さんと一緒になれると思つておつた。わしが唯一長続きした弟子だったからな。腕に自信もあった。だが、女心は少しもわかつておらんかった。お嬢が惚れた男は、わしが逆立ちしても勝てん相手だった。死んでおつたからな。独り身を通すつもりでおつたのよ。わしの勝手な思い込みだ」

ニシムラが溜息をつく。

「だからな、師匠はわしに化粧彫りは教えんかった。お嬢にだけ教え、それで良しとしておつたのだろつ」

「だから、教授は、あんたを途中で放り出した」

「わしの方が見限つたんだ！」

マーチンは肩をすくめた。

「そういうことなら、それでいい。ところで、あなたが写真の刺青を彫れないという理由はなんだ？」

「ふん、気が短い奴め。刺青のことを知らんから、教えると言ったのはお前だろうが。まあ、いい。わしが彫れんと言ったのは、この刺青の色が出せんからだ」

なぜとマーチンが聞く。

「刺青の墨は決まっているからよ。この色を出すには、この墨とな。刺青が今のようになったのは、三百年は前のことだ。ということとは、既にその頃には使う墨は決まっていたということだ。今でも使う墨はほとんど変わっちゃいねえし、出せる色も変わっちゃいねえということだ」

「では、どうやってこの色を出しているんだ」

「それこそ、最新のテクノロジーという奴じゃねえのか」

「そう言われてはみもふたもない。あんたはこの写真の刺青は本物ではないと言いたいんだな」

ニシムラが頷く。

「じゃあ、いったいこれは何だ」

マーチンが肩をすくめながら聞く。ニシムラは、写真の角を自分の顎の先にこっこつ当てながら、何か考えていた。

それを考えるのがお前の仕事だと言いたいところだがと、前置きしてニシムラが話し始めた。

「例の教授のところには、世界中の刺青に関する資料があつたのは嘘じゃねえ。わしの目から見て、半端な数じゃなかった。その資料に妙なものがあつたのを思い出したぜ。東南アジアのどこかの国の部族の資料だ。カンボジアだったか、ベトナムだったか、そこまでは覚えていねえ。とにかく、昔からの生活を変えていねえ連中だ。そいつらが、動く刺青を持っているってことだ」

「動く刺青？」

「生きている刺青と言つてもいいかもしれん。その刺青は彫り師が墨を入れるんじゃない。魔術師つていうんだか、巫女つていうんだか知らんが、部族の儀式を取りまとめる奴だ。そいつが刺青を施す。入れる場所は、背中の場合もあれば、腹の場合もある。特別な儀式用の小屋に二人で入つて、次の日には刺青が入つていて寸法だ。背中の彫物なんざ、何年もかかるのはざらだつてのに、たった一晚だつてよ。それだけじゃねえ。その刺青は何年か経つと形を変えたり消えたりするとも……信じられるか？」

ニシムラがだんだん早口になり、口の隅に唾が溜まつてきた。マーチンは相変わらず肩をすくめるだけだった。

「わしはその刺青の写真を見たことがある。やはり、刺青とは思えん墨が刺されていたし、その姿も生々しかった」

「図柄は何だったんだ」

「虎さ。しかも、入れた男の通り名が 狂い虎 だと言つじゃねえか。でき過ぎの話だな」

「その虎と、この写真の刺青が似ているのか」

「色やら生々しさとかがな。似ている気がする」

マーチンは腕を組んで考え込んだ。生きている刺青か。話としては面白いが、レオンの身元の手掛かりになるかどうかとは別問題だった。ニシムラが刺青を入れたのではないことだけがわかったことになる。

「あんた以外に、こうした刺青を彫れる奴はいないのか」

「さつき言ったように、これは刺青とは思えねえし、百歩譲って刺青だとしても、今時こんな図柄を彫れる奴はいねえ」

マーチンは礼を言つて立ち上がった。内ポケットからオートコール機能が付いた名刺を取り出し、ニシムラに渡した。

「何か思い出すことがあったら、連絡をくれ」

そう言い残してマーチンはドアへ向かった。ニシムラは彼を送る気はなさそうだった。マーチンがビルを出ると、空が暗くなりかけていた。雨が近づいている。マーチンは足早に地下鉄に向かった。